

新たな「からだほぐし」の教育内容 —「体ほぐしの運動」のとらえ直しと先行実践の批判的検討—

学校体育マネジメントコース
5006A347-0 築田陽子

研究指導教員： 友添秀則教授

1、本研究の動機・目的

「体ほぐしの運動」が導入された当初、「体育における新しい可能性を胚胎させている」と注目された。しかし、いまだ学校現場には旧来の「体育観」「身体観」が支配し、実践も広がりを見せてはいない。

一方、現在進行している次期学習指導要領改訂論議では「体ほぐしの運動」の位置づけは明らかに後退をみせている。

本研究では、1999年(平成11)年「高等学校学習指導要領」改訂時に導入された保健体育科の目標「心と体を一体としてとらえる」観点及び体育の内容として示された「体づくり運動」を構成する「体ほぐしの運動」導入の経緯とねらいを明らかにし、児童・生徒に求められる「体ほぐしの運動」と教科「保健」との関連をもった新しい「からだほぐし」の教育内容を提案することにある。

2、研究方法

本研究は、雑誌『学校体育』および『体育科教育』上に掲載された論稿・実践報告を対象に、「心と体を一体としてとらえる」観点や「体ほぐしの運動」が導入された経緯について明らかにしていく。また、これらの論稿・実践報告をキーワードにより分類し、内容については批判的に検討していく。

本研究の観点から、雑誌検討は、第15期中央教育審議会審議開始年から、中央教育審議会教育課程部会「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」中間報告公表年までの期間に発行されたものを対象とする。

さらに『心と体』、『体と心』を一体としてとらえる「観点」や「体ほぐしの運動」について日本体育学会大会におい

たと感じ合う「学習」として、意義あるものと考えられる。第2章では、学校体育が戦後も身体を「躰・訓練」の対

て報告された論文についても本研究の対象としていく。ここでは、第51回～第54回大会を分析対象とした。

3、本論文の構成

本論文は大きく序章、第1章「体ほぐしの運動」導入の背景、第2章「体ほぐしの運動」と学校体育の課題、第3章 新しい「からだほぐし」の教育内容、終章により構成されている。

4、論文の概要

序章では「体ほぐしの運動」導入の経緯とねらいを明らかにし、子どもの学習活動にふさわしい「からだほぐし」の教育内容を提案することを述べた。

第1章では、1980年代からすすめられた「教育改革」論議の中で、社会問題化した「いじめ・自殺」「不登校」「キレル子ども」の原因が子どもの生活習慣の乱れ、ストレス及び不安感の高まりにあり、対策として「心の教育」や「生きる力」など、子どもたちへ「こころ」や「生き方」などの道徳観の高まりを求めていることを検証した。

筆者はこの原因分析の不十分さ、対策への疑問からあらためて子どもの心身の状況を分析し、子どもの成育・生活環境の悪化や「子ども期の喪失」が「からだの不調」「からだの発育不全」を招いていることを明らかにした。

子どもによる社会化する問題は、心身の発育・発達途上で起こっており、子どもの教育課題として「こころとからだ」をとらえる必要がある。

「心と体を一体としてとらえる」観点や「体ほぐしの運動」は、からだの支え方を生活から学ぶことができなくなった子どもにとって、自分のからだと向き合い、他者のから

た。

旧来の体育観・身体観に対して「体ほぐしの運動」は、からだの実感に根差して身体感覚を高め、また他者と交われる、コミュニケーションできるからだを子ども自身が取り戻すことをねらいとしている。ねらいにふさわしい学習内容や、「体ほぐしの運動」で何を教え、どのような力を育てるかを明らかにしていくことが保健体育科に求められた課題であった。

しかし、新しい観点や「体ほぐしの運動」の導入は体育関係者にとって「突然」提案されたものとの感が拭えず、また学習指導要領の「スピード告示」とも相まって、ねらいや内容が十分論議されないままに今日に至っているのである。

第3章では、「体ほぐしの運動」のねらいを発展的にとらえ、筆者は新しい「からだ観」に立って教え育てるべき教育内容を提案する。

新しい「からだ観」とは、主体者である子どものからだを育てる観点であり、子ども自身が「生きたからだ」を認識し、生命体としてその生命を生きるという「主体としての身体」という「からだ観」を形成することにある。

そのために「体育」では実感を伴った身体感覚と認識力（意識化し言語化する）を高め、他者と向き合い理解を広げることをねらいとした。「保健」では自分の身体の「しくみ」や「はたらき」への科学的理解をすすめる、人間のもつ自然治癒力・自然調整力を認識させる。

先行実践は筆者の新しい「からだ観」を育てる観点から

批判的に検討した。

終章では、研究のまとめと今後の課題を述べた。

5、論文の要約と今後の課題

「体ほぐしの運動」導入は旧来の体育観・身体観を問い直す契機であった。しかし「この運動によって何が身に付いたかを評価・評定しなくてもよい」「3つのねらい（「体への気付き」「体の調整」「仲間との交流」）のどこかにアプローチすればよい」「既存の運動を『体ほぐしの運動』になるよう扱い方の工夫をすればよい」との発言が現場実践をリードし、「体ほぐしの運動」のねらいを希薄化させてしまったのである。

しかし、現代の消費社会は身体の変容と倫理観を大きく変え、科学や医学また健康・スポーツ産業に「からだ」を預けることが常識となっている。しかし、社会の歪みが反映されている子どもの「からだやこころ」の現状は「からだほぐし」の学習を必要としており、「からだ育て」が学校教育全体の課題として指摘されているのである。

いま、体育授業の改革を大いに議論すべき時なのである。よって筆者は新しい「からだほぐし」の授業内容を提案し、体育における「身体観」の問い直しを期待するものである。

今後、「からだほぐし」の教育内容の体系化に向け、ドイツの「身体教育」、アメリカの「フィットネス教育」等にも学んでいきたい。